

ハケ目は多く斜方向であるが、縦方向(23・24)や横方向の調整を断続させた15・16は例が少い。突帯は粘土紐を指で両面から押えて貼付した後、横ナデを施すが、その形状は低平である共通点を除いて種々である。直径は、基底部付近の遺存する埴輪列の例から推して三〇〜四〇センチ前後が多い。

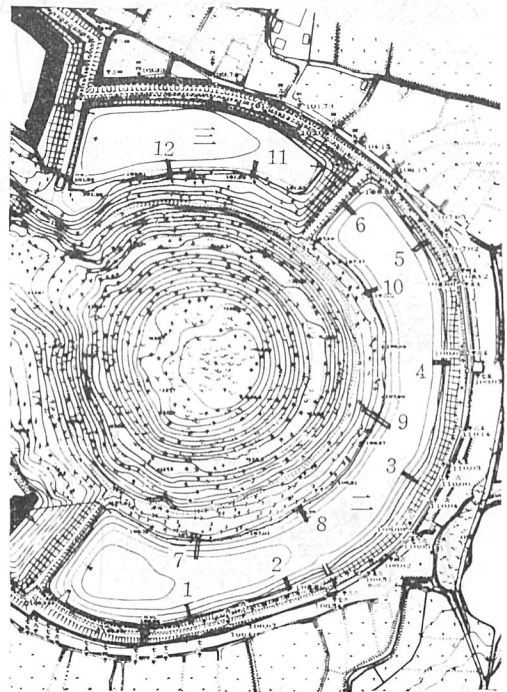
瓦(第5図28)瓦の大部分は、第2トレンチから出土し、くすべ焼きの表裏とも平滑なものであったが、中に縄目と布目のある28がある。

(笠野 毅)

二 崇神天皇陵外堤及び墳丘護岸区域の事前調査

崇神天皇陵後円部の二号堀外堤護岸工事の施工に当って、昭和五十一年十一月に事前調査を実施した。同時に昭和五十三年に施工予定の後円部第二号・第三号堀に面する後円部墳丘裾部の護岸工事の事前調査をも実施した。

調査に当っては長さ六〜一三メートル、幅二メートルのトレンチを二箇所を設定し(第7図)、第一〜第五トレンチを二号堀外堤に、第六トレンチを二号・三号堀間の渡土堤に、第七〜第一〇トレンチを二号堀墳丘に、第一一・第一二トレンチを三号堀墳丘に設定した(第八トレンチの調査は実施せず)。調査の結果をトレンチ番号順に、はじめに二号堀外堤よりのべることとする。

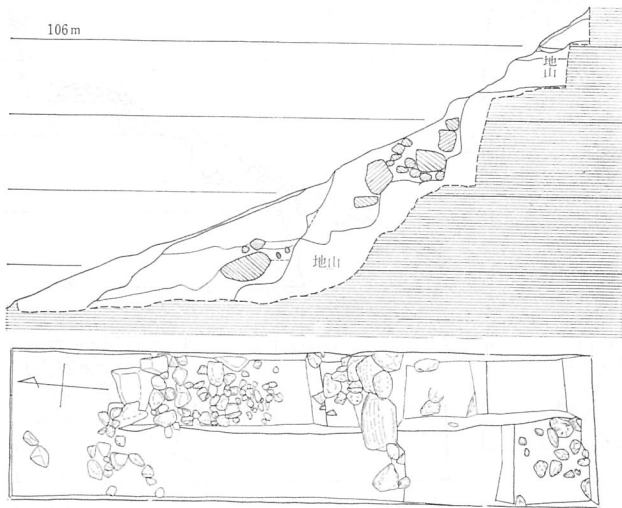


第7図 崇神天皇陵トレンチ位置図(1/3000)

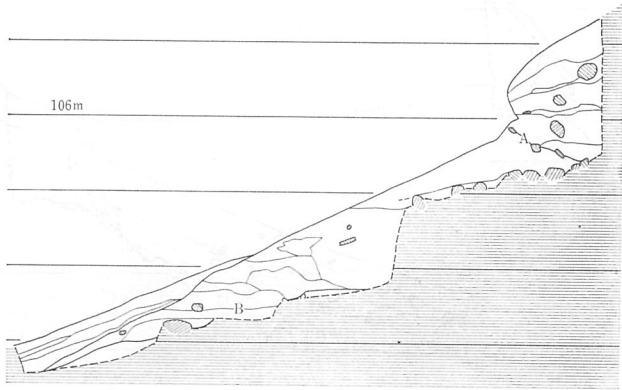
(二号堀外堤)

第一トレンチ(第8図1) トレンチ上部の満水線(海拔一〇六・〇二メートル)のあたりは風化礫を交えた堅い粘土質の地山(朝和層)が波にあらわれて露頭していて、満水線下一〜二メートルのところには地山を掘り込んで設けた護岸状の粗い石組があり、この下部にも掘り込みが認められる。なお古絵図を検すると、二号堀はほとんど耕地となっているが、第一トレンチを設定したこの部分は古増刈池と呼ばれる用水池となっている。現在堀幅は二号堀の他の部分と比べてかなり広く、堀底も二メートル近く深くなっていて、現在の一号堀に寄ったこのあたりの外堤は、本来の位置よりかなり後退しているように思われる。

第二トレンチ(第9図1) 厚さ一〇センチ前後の表土の下に、現在の外堤法面に平行するように約三〇度の勾配で傾斜した地山の朝和層が検出された。トレンチ上部の満水線よりやや低いところに、この地山を切り込んで約一五度のゆるい段をつくり、一〇〜二〇センチの礫を地山につき込むようにして置いた葦石状の礫が認められた。検出された地山の法面が何時頃形成されたものかは明らかでないが、二号堀が地山を修形することによって造成されたことを示すものであろうか。



1 第1トレンチ



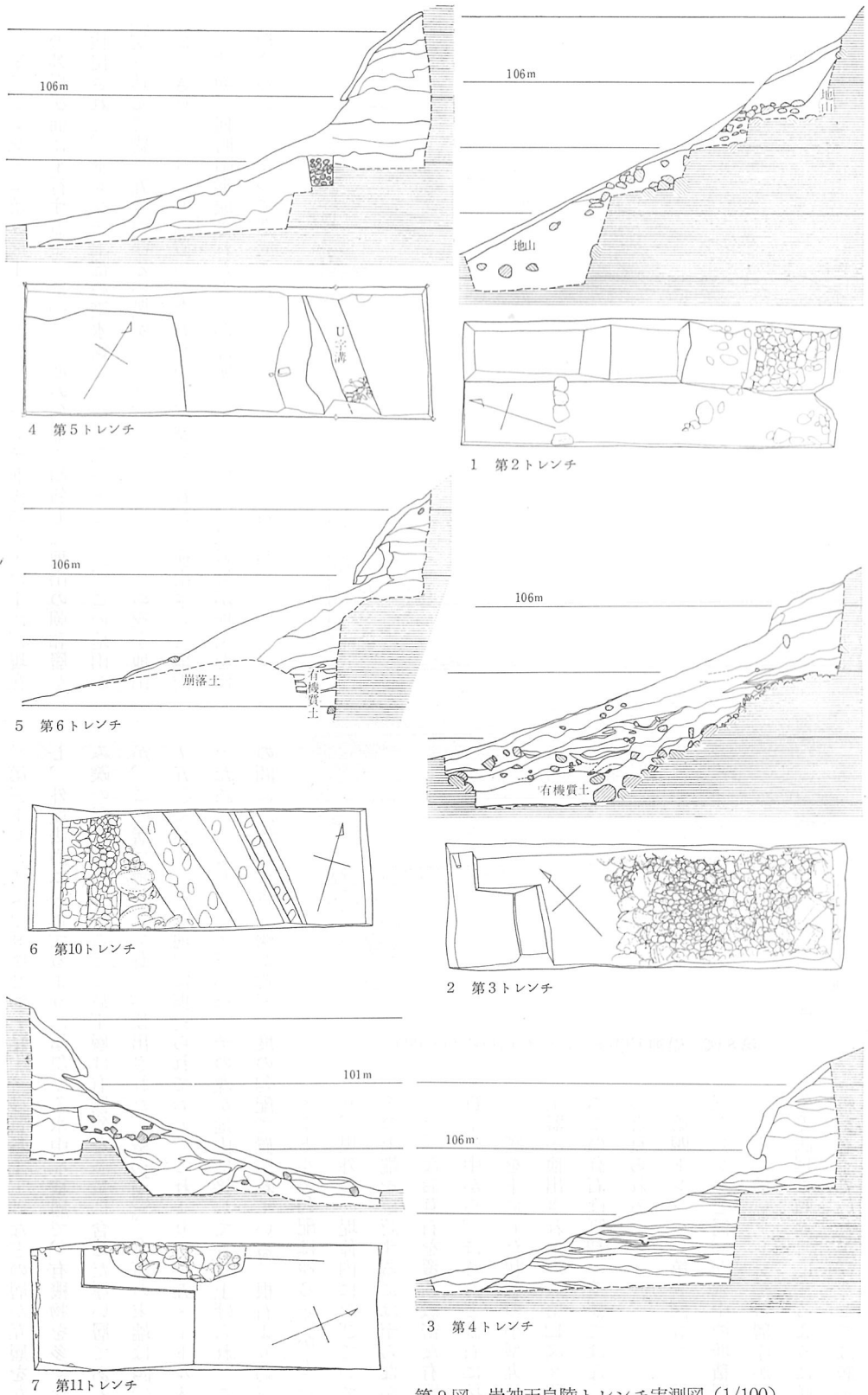
2 第7トレンチ

第8図 崇神天皇陵トレンチ実測図(1/100)

第三トレンチ(第9図2) 粘土・砂質粘土・砂などの層が互層をなし、外堤法面に平行するように傾斜する水中堆積層で、有機物を多く含む礫の混入が多い。ことに最下層は有機物を多量に含んだ厚い層であるが、この層に覆われて葦石が検出された(第12図)。葦石の末端は四〇〜五〇センチの礫が地山に据えられており、これより一・五メートル入ったあたりより二〇〜三〇センチの礫が地山に接して葦石上げられ、この間に比較的小さな礫が約三〇度の勾配で置かれている。根石より約三

メートルで勾配はゆるやかとなり、現外堤の堤体内にのびていてその上端を確認するには至らなかった。なお葦石を覆う緻密な有機質土の中から、ほとんど葦石に接して底を下にした状態の小型丸底土器が検出されたが(第12図×印)、この葦石は原初の遺構ではないかと見られる。

第四トレンチ(第9図3) 第三トレンチと同様な水中の堆積層である。第三トレンチの層序が現外堤法面の傾きに応ずるように傾斜をもっていたが、ここでは層が



第9図 崇神天皇陵トレンチ実測図 (1/100)

全く水平に走っていて、第三トレンチの葺石に対応するような葺石遺構の検出を見なかった。満水線より上の堤体部には、粘性土を幾重にもつきかためた土が、版築状に堆積層の上に積み上げられている。

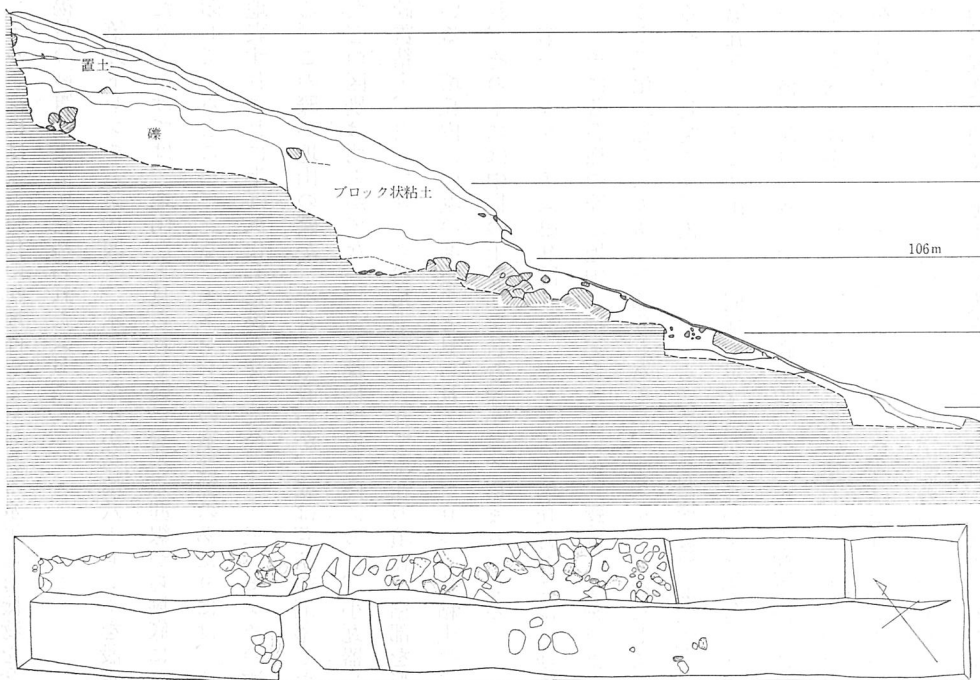
第五トレンチ(第9図4) 最下層に半ば風化した小礫を交えた地山の粘土層が認められ、その上に厚い粘土層がある。満水線より上の堤体には粘性土をつきかためた版築状の盛土が認められた。ほぼ水涯線附近の地表下数十センチのところに断面がU字状をなす溝を検出したが、溝の深さは四〇センチ、幅は上面で四〇センチ、底で三〇センチあり、溝大の石が詰められていて、現在の外堤の縁に対して約三〇度の角度をもっている。

(渡土堤)

第六トレンチ(第9図5) このトレンチは掘削壁の崩壊のため十分な観察が行なえなかったが、水涯線下の地表下一メートルに有機物を含んだ堆積層が見られ、深くなるにつれて有機物の量を増し、渡土堤側に向って僅かに立ち上りを見せる。堤体は版築状の盛土でその裾が厚く堆積土を覆っていて、この渡土堤が当初より現在のような規模をもたなかったことを示している。

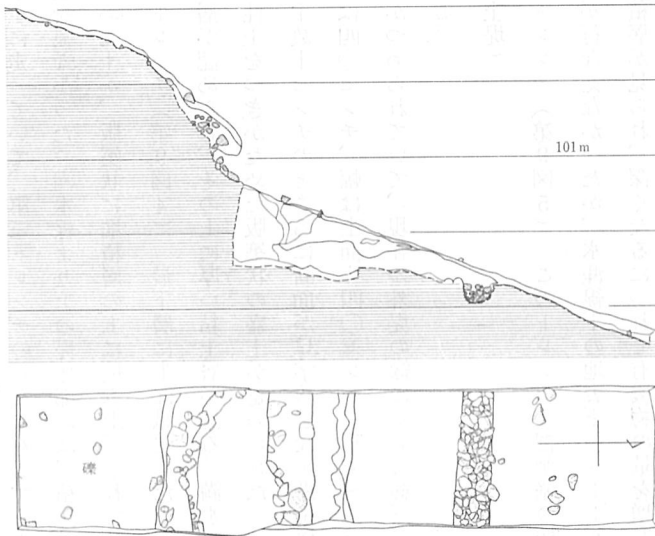
(二号堀墳丘)

第七トレンチ(第8図2) 海拔一〇五メートルより上の部分に、径一五センチ前後の礫が一〜二重散布しているのが認められたが、この礫群は葺石と云うには石の配置に秩序が認められないものであった。なお



第10図 崇神天皇陵第9トレンチ実測図(1/100)

この礫の上には径八〜一四センチの鎌倉時代後期の素焼の小皿が三九個見出された。なかには底を上にしてあるものもあった。この礫群は砂質粘土層で覆われているが、この層は墳丘裾の法に対して逆の勾配で切られており(A)、その上には版築状に盛土が行なわれている。つまり或る時代には礫群が地表に顕われていたが、のち覆われ、更にこの覆土が切られ版築状に粘土を幾重にもつきかためて護岸を行なっている。トレ



第11図 崇神天皇陵第12トレンチ実測図(1/100)

ンチの下部には或る時代の耕地面かと思われる水平な有機物を含んだ灰褐色の砂質粘土層が認められた(B)。

第九トレンチ(第10図) 本トレンチから第八トレンチを設定したあたりにかけては、地山かと思われる堅い層が水涯線から堀底にかけて露頭しているところである。本トレンチの水涯線のあたりには、ほとんど地表すれすれに半ば風化した礫を交えた径二〇〜三〇センチの礫群がある。この礫が地山の礫か、それとも葺石か、或は葺石の崩落したものかなどの区別は明らかでない。この礫群は墳丘内にのび、小瓦器片を含む砂質粘土、更にブロック状粘土に覆われて現在の墳丘の裾部を形成している。墳丘内には堀の堆積土と見られる土がブロック状粘土の上に置かれ、その下には中世の土器片を含む礫が厚く積まれている。

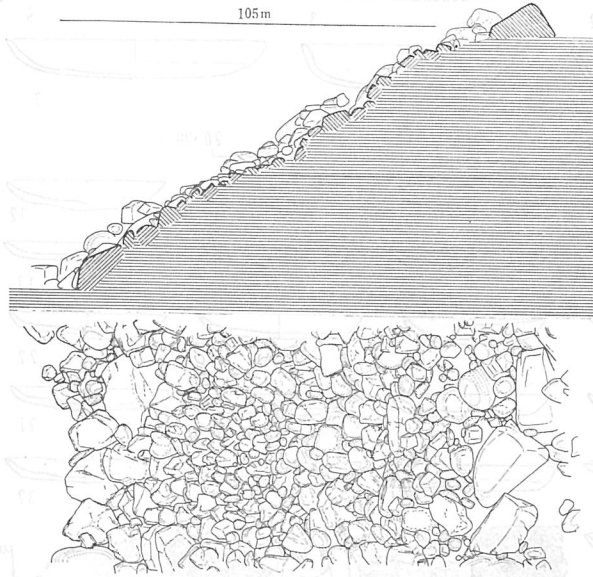
第一〇トレンチ(第9図6) トレンチの墳丘寄りには、地表下五〇センチに葺石様の礫が地山に据えられている。礫は大小種々あり表面に多少風化が見られ欠落した部分もあるが、明らかに面をなして、ゆるやかな勾配で墳丘内にのびている。この葺石様の礫の面を掘り込んで、第五トレンチで検出したと同様のU字溝が墳丘の裾に平行して走っている。溝の深さは四〇センチ、底幅四〇センチで上部は僅かに開いている。溝内には拳大の礫が詰められ、本来は空石づめであったと思うが現在は粘土でかなり埋まっている。なおレベルは第五トレンチのU字溝のそれと全く等しい。葺石様の礫の面はU字溝の外側で、墳丘の縁に対し約三五度の角度で地山ごと大きくかきとられ、かきとられた地山の底に

は浅い溝が刻まれている。

(三号堀墳丘)

第一一トレンチ (第9図7)

トレンチ中央部の西寄りに堆積土を掘り込んだ落ち込みの一部を検出したが、いかなる遺構であるかは明らかでない。全体に堆積土が厚く、落ち込みの上部を礫が覆っている。トレンチの奥壁の上端より一・五メートル下に土器小片を検出しており、現在の墳丘裾部にはかなり盛土されていることが知られる。



第12図 崇神天皇陵第3トレンチ葺石実測図 (1/50)

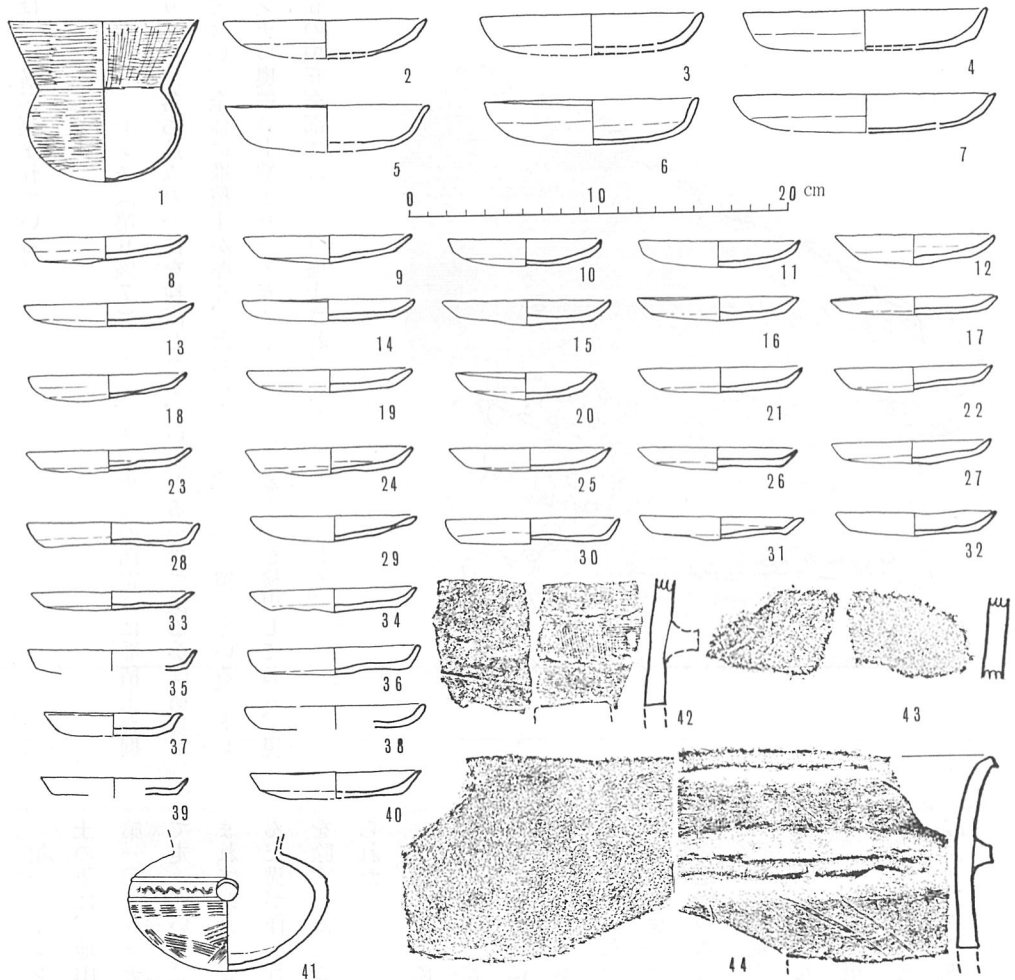
第二二トレンチ (第11図)

墳丘裾から約三メートル掘側の浅い堆積

土の下に、地山の朝和層を掘り込んで設けたU字溝を検出した。第五・第一〇トレンチで見られたものと同様のもので、ほぼ墳丘の裾に平行して走っている。墳丘裾とU字溝の間にも浅い溝状の遺構が地山に掘り込まれており、この溝が堆積土で覆われたのち、更にこの堆積土を掘り込んだ溝が作られている。水涯線より約三メートル内側に墳丘裾部の表土を除去したところ、裾部が拳大の礫でびっしりと覆われているのが認められた。

上記のように各トレンチはそれぞれその様相を異にしているが、先にも述べたようにかつて堀はすべて耕地や用水池として利用されており、その維持管理に堀の周辺部はたえず人工が加えられたことが想像され、また幕末の柳本藩の修陵事業によって堀が全面的に復旧された際に、水位を高めるために、堀の周辺に種々なる手当が行なわれたことなどを考慮せねばならない。このように後世加えられたであろうと思われる造作が、遺構の状況を複雑多岐にしているように思う。

二号堀外堤の護岸工事に際しては、現在の外堤法面の保存を眼目とし、昭和四十九年度に一号堀の外堤護岸に用いたと同様の工法を採用した。すなわち現外堤法面の全面にトリカルネットを覆って今回の施工部分と区別し、その上に割石を置き更に雑割石をならべて空石張とし、裾には抗を打ち丸太胴木を据えて滑り止めとした。



第13図 崇神天皇陵出土品 (1/4)

出土したものは土師器・須恵器・埴輪・磁器・瓦器・瓦その他白礫等である。

土師器(第13図1~40) 古式土師器と中・近世のカワラケとがある。

小型丸底土器(1) 第3トレンチで検出された外堤の葺石(第12図×印)に接して出土した。やや扁平な球形胴に大きく開く長い直口縁を付す。外面は横へラ研磨を全体に施し、内面は、胴部をナデのままにし、口縁部を横へラ研磨の上さらにやや粗い縦へラ研磨を加えた丁寧な仕上の土器である。

皿形土器(2~40) 全て第7トレンチの配石遺構に伴って出土したもので、中型(2~7)と小型(8~40)とがある。いづれも手捏である。小型の一部には、ススの付着が認められ、灯明皿として用いられたことが知られる。

須恵器(第13図41)

甕(41) 外堤第4トレンチの池床堆積土中より出土。口頸部は、つけ根の接合部分ではづれて欠失。胴部最大径は上位にあって二条の突線で区画された中を9本1条の波状文を施す。胴下半部

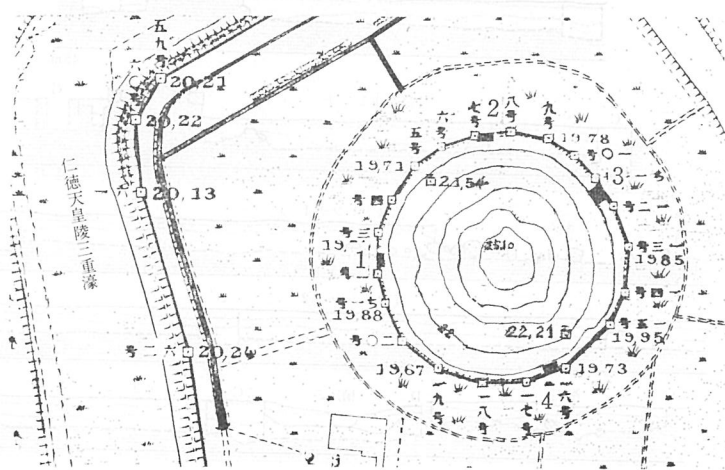
には平行タタキ目、底部はほぼ方形状に平行タタキ目を施してナデ消す。
 埴輪（第13図42、44）

円筒部の破片のみ。42は横ハケの上に縦ハケを加えて突帯を貼付け、突帯間は、横ハケを施した上から方形の窪みを付す。方形であるうか、突帯と平行な透孔の一边が見える。44は、直立した短い口縁部が端部で大きく外反し、いわゆる外削ぎの口唇部をつくる円筒埴輪で、黒斑がある。突帯に平行な透孔の一边が認められる。ともに外堤第3トレンチの池床堆積土中より出土。

白礫 榎山古墳後方部などに見られる直径1〜3センチの丸い白礫が7トレンチで数個採取された。
 （笠野 毅）

三 仁徳天皇陵陪冢ち号外構柵設置区域の事前調査

当陪冢は源右衛門山と称し、仁徳天皇陵後円部の東北に接する径約三メートル、高さ約五メートルの円墳である。大正十五年測量の地形図には境界外に幅約八メートルの周溝の跡があるが、現在はその痕跡も殆どなく、却つて墳丘裾部に当る境界線の辺に高さ六〇〜一五〇センチ盛土されている。外構柵は境界線上に約五〇センチの穴を掘り柱を立てて施工するので、工事による掘削は盛土の部分に止まると思われるが、昭和五十一年二月に事前調査を実施した。調査に当っては四本のトレンチを設定した（第14図）。第一・二・四トレンチは長さ二メートル、幅一



第14図 仁徳天皇陵ち号陪冢トレンチ位置図 (1/1000)

これをさけて墳丘側に幅を一メートル延長したところ地表下三〇センチに黄褐色の粘性土が認められた。この粘性土層は緩傾斜で、境界線に向けて下向し、やがて急傾斜で落ち込むので、本来の墳丘の裾から堀への法面である可能性も考えられた。然し工事の掘削は盛土中で処理できると考えられるので予定の工事を施工した。
 （戸原純一）

メートル、深さ〇・五〇・七メートルで掘削部分はブロック状粘土、植物性繊維を多量に含んだ腐蝕土を主とし、ビニール、煉瓦、瓦片、スレートなどが混在しており、極く新しい盛土と認められた。第三トレンチは他のトレンチと同じ規模であったが、地表下の攪乱層に径二五センチの土管が埋設されていたので、